

みず

べ

りん

水辺林は生き物たちのオアシス



ユビソヤナギの花／伊南川で発見された珍しいヤナギ

魚がいなくなった

ハヤやイワナが釣れなくなったといわれています。カジカはめずらしい魚になってしまいました。放流はしているのに、どうしたのでしょうか。

以前の川には、深い淵やせせらぎがありました。水辺にはヤナギやハンノキが影をおとしていました。魚たちがすめる環境が現在の川にはないのです。

そして、いつのまにか川はきたなくて危険だから近寄ってはいけないと子どもに教えるようになりました。

命を失った川

いまの川は、コンクリート堤防となりました。流れはまっすぐにされ、中洲もはぎ取られました。それは、わたしたちの家や暮らしを守ってくれたことは確かです。でも大切なものも失いました。

群れ泳ぐ魚、水辺にいこう水鳥、川辺を縁どる木々。

そう、川辺は生き物たちのオアシスだったのです。わたしたちは自分の身を守るばかりで、魚や木と仲よくしていたころを忘れてしまったようです。

水辺林をよみがえらせよう

水辺にしげる木々は、華やかではありません。でも、いろいろな生き物のすみかとなり、素朴な美しさは水辺に欠かせない景観です。それは、多くの生き物だけでなく、わたしたちにとっても、大切な環境なのです。



只見川に春をつげる新緑の水辺林

編集・発行

只見の自然に学ぶ会

イラスト：子安香里

みず べ りん

水辺林の大切なはたらき



水辺林とは、川岸に生える樹林帯のこと。
でもその水辺林には大切なはたらきがあるのです。

魚たちの休息場所になります。

水辺林がつくる日陰は、魚たちのいこいの場所。
外敵が近寄れません。

魚たちのエサ場になります

木からは虫が落ち、水底には水棲昆虫が集まります。
そこは魚のエサ場です。



溪流を飛び交うカワガラス

鳥やけものたちの隠れ場や移動通路です

多くの種類の生き物が生息していることは、自然が豊かな証拠です。

水温の上昇を抑えてくれます

夏の太陽は、川の水温を上げてしまいます。
でも葉っぱでさえぎられると、水温が一定になり、魚や水棲昆虫も一息。
水辺林は、川のヒサシの役目をします。

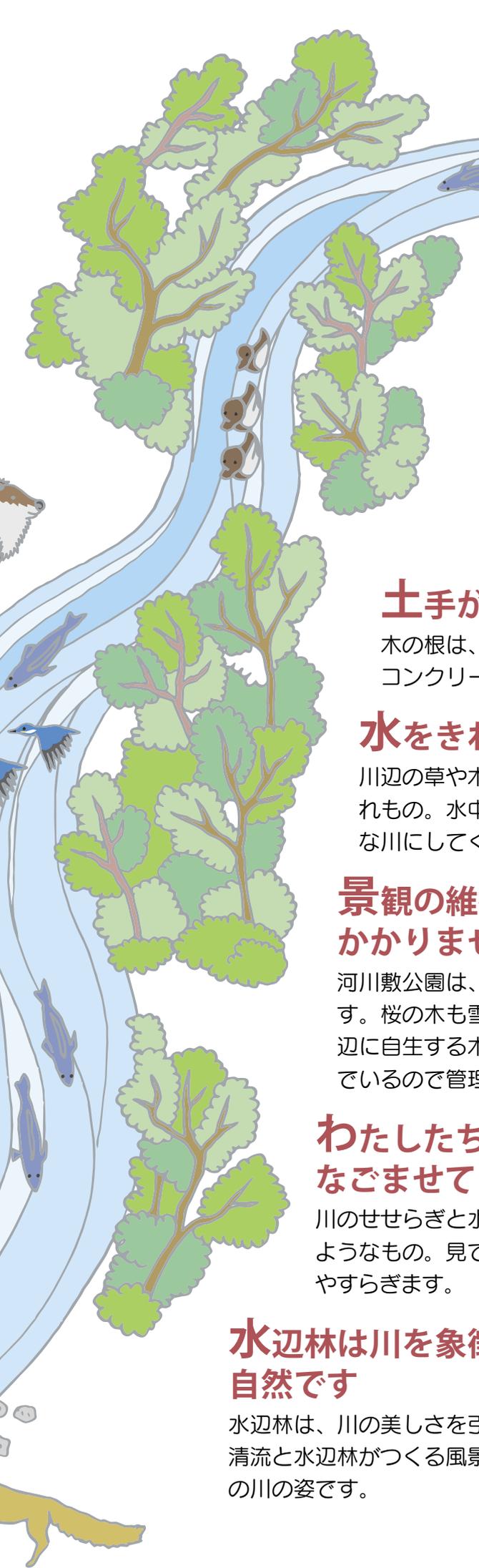


みごとな溪畔林が発達する黒谷川



水辺の元気者・イソシギ





只見川と蒲生川合流点付近の水辺林

土手がくずれのを防いでくれます

木の根は、土手が水流でけずられるのを防いでくれます。コンクリートよりも自然にやさしい堤防です。

水をきれいにします

川辺の草や木は、川を浄化してくれるすぐれもの。水中の有機物を吸収して、きれいな川にしてくれます。

景観の維持に手間やお金がかかりません

河川敷公園は、造成や管理にお金がかかります。桜の木も雪や病気に弱くて大変。でも水辺に自生する木なら、その自然環境になじんでいるので管理費はゼロです。

わたしたちの気持ちをなごませてくれます

川のせせらぎと水辺林は、恋人のようなもの。見ているだけで心がやすらぎます。

水辺林は川を象徴する自然です

水辺林は、川的美しさを引き立てます。清流と水辺林がつくる風景こそ、ほんとうの川の姿です。



岸辺に咲くオニシオガマ



水辺でいこうオシドリのペア

川の宝ものってなあに?

「水辺林再発見プロジェクト」

2003年6月17日、水辺林の大切さを語り合うシンポジウムが只見町の季の郷・湯ら里で開催されました。基調講演の後、「川の宝ものってなあに?」というテーマで話し合いが行わ

れ、翌日には「水辺探検隊 in 黒谷川」と銘打つ水辺林や野鳥の観察会も行われました。参加者70名。これからの水辺のあり方をめぐるホットな報告をご紹介します。

講演 「川と水辺のたいせつな関係」 発言要旨



鈴木和次郎 (つくば市・森林総合研究所)

水辺林とは、簡単にいえば増水すると氾濫するような場所にある森林をいう。その役割は、水質の維持や水源の涵養、斜面の崩壊や土砂流出の防止、水害防止などがあげられる。生物の多様性という面からは、水域と陸域の間にある移行帯として動植物の生息場所、移動や分散する回廊として重要

である。また、日光をさえぎって水温の上昇を抑え、落葉や落枝、落下昆虫を供給し、水棲生物の栄養源として食物連鎖の基礎を支えている。現在の水辺林は、開発によって改変・断片化され、生態学的機能が失われている。これからは、人工的な環境復元ではなく、川が本来もっていた生態学的な役割を重視し、本来の河川環境を取り戻していかなければならない。

パネルディスカッション「川の宝ものってなあに?」 発言要旨

鈴木和次郎

川は、単に水が流れるものと考えるのではなく、水と水辺林との相互作用の上に成り立つ自然環境としてとらえなければならない。洪水は、川を攪乱することによって生き物の生息環境を豊かにする効果もある。川と人間のつき合い方はむずかしいが、今ある水辺林をできるだけ残していくことが必要である。



小沼信孝 (只見町・唱若衆会)

水中の石に生える珪藻類が、川の生き物を支えている。これが家庭排水や河川改修によって異常繁殖し、藻が腐って水が汚れてきた。水棲昆虫もすめず、魚にはすみにくい世の中になった。水質を浄化するために水辺林やその下草の効果は大きいと思う。



佐藤弘吉 (只見町・只見の自然に学ぶ会)

むかしの川は、子どもたちの遊び場。ヤナギの木は、日光をさえぎり、水の流れも変化させて魚の寝床となり、絶好の釣り場だった。今の川は、瀬や淵がなくなり、まっすぐになって魚のすめる環境ではなくなった。水辺のヤナギを見直してほしい。



岡村 健

(田島町・奥会津グリーンストッククラブ)
ヨーロッパは、川を自然にもどす河川政策を進めている。洪水にはスケールの大きい氾濫原を作って対応している。かつて人は川に癒されていたということに気づいてほしい。これからは流域の人たちも河川行政にはっきりものをいうべきだ。



遠藤由美子 (三島町・奥会津書房編集長)
コーディネーター

人間を守るための治水、産業のための利水から、自然環境を保全し、さまざまな生き物がすめる水辺づくりをする時期にきている。不便とは思っても、人も水辺林の生き物たちの仲間に加わることができるようにしていきたい。

※このシンポジウムの記録は、只見の自然に学ぶ会のホームページでみることができます。

<http://www2.mnx.jp/macska/manabukai/>



只見の自然に学ぶ会

[事務局] 〒968-0602 福島県南会津郡只見町大倉字窪田1637 佐藤方

tel & fax: 0241-86-2918 mail: manabu@mnx.jp

<http://www2.mnx.jp/macska/manabukai/>

●このパンフレットは、福島県治水協会支部交付金の補助を受けて作成したものです。